

「ソフトウェア開発データが語るメッセージ 2015」を公開

～3,541 プロジェクトの分析からベスト・プラクティスの傾向などを明らかに～

IPA（独立行政法人情報処理推進機構、理事長：藤江 一正）技術本部ソフトウェア高信頼化センターは、ソフトウェアの信頼性向上を目的に、IPA が保有する 3,541 件のプロジェクトデータを分析することで得られたベスト・プラクティスの傾向や指針を、「ソフトウェア開発データが語るメッセージ 2015」として取りまとめ、IPA のウェブサイト上で 9 月 25 日（金）に公開しました。

URL : <http://www.ipa.go.jp/sec/reports/20150925.html>

IPAは、2004 年から企業におけるソフトウェア開発プロジェクトのデータを収集し、ソフトウェア開発のベンチマーキング⁽¹⁾に活用できる指標値などを統計データとして「ソフトウェア開発データ白書⁽²⁾」を発行・提供しています。

ソフトウェア開発においては、不具合をあらかじめ解消し、信頼性の高いソフトウェアを開発することが求められますが、そのためには統計データを参考に、自社プロジェクトをベンチマーキングし改善を図ることが重要です。

今回公開した「ソフトウェア開発データが語るメッセージ 2015」（以下、本書）は、ソフトウェアの信頼性をより一層向上させることを目的に、これまで公開されてきた統計データでは示されていなかった「ベスト・プラクティスをヒントに改善を図る」という点に着目し、IPAが保有する 3,541 件のプロジェクトデータを分析し、そこから得られたベスト・プラクティスの傾向やソフトウェア開発における品質マネジメント⁽³⁾の指針を取りまとめたものです。

本書は「ベスト・プラクティスでは、設計の文書化・レビュー・テストなどの品質保証プロセスや組織体制にどんな傾向があるか」、「信頼性を確保するためには、どの程度まで品質保証プロセスを実施すれば良いか」といった観点でまとめており、ソフトウェア開発における開発プロセス・品質保証プロセスの改善を図るための指針を示しています。

本書に掲載している指針の一例は以下の通りです。

- ベスト・プラクティスは「上流工程」に注力。テスト時の不具合が少ない傾向に（別紙①）
- 設計レビューの効果を勘案した「設計レビュー工数」のコントロールを（別紙②）
- 顧客が要求仕様に関与しているほど、生産性と信頼性が向上する傾向に（別紙③）

⁽¹⁾ 自社の技術力や製品の品質などを表わす指標値を同業他社など優良企業の数値と比較分析し、自社の現状や改善ポイントを把握するための経営改善・業務改善手法。ソフトウェア開発では類似事例の実績値を参考に、生産性や品質を比較・評価するためにも用いられる。

⁽²⁾ IPA が保有する 3,541 件のソフトウェア開発プロジェクトデータを整理・分析した統計データ。

<http://www.ipa.go.jp/sec/reports/20141008.html>

⁽³⁾ 顧客要求への対応など、求められた品質を確保することを目的に、開発プロセスや組織の改善に向けて PDCA サイクルを継続して実施するなど、品質に関して組織を指揮し管理するためのマネジメントのこと。

上記以外にも「設計文書量・テスト量のコントロール」や「品質保証体制など組織体制の整備」などを掲載しています。

IPA は、本書の活用を通じて、ソフトウェア開発現場の品質マネジメントが改善され、ソフトウェアの信頼性がより一層向上していくことを期待しています。

なお、IPA では本書の公開にあたり、本書の普及や活用促進を目的に、10月16日（金）にセミナーを開催する予定です。詳しくは以下の URL をご覧ください。

■SEC セミナー

「3,500 プロジェクトの開発データで実証された品質マネジメントのヒントと現場事例」

URL : <http://sec.ipa.go.jp/seminar/20151016.html>

■本件に関するお問い合わせ先

IPA 技術本部 ソフトウェア高信頼化センター 佐伯／塚元

Tel: 03-5978-7543 Fax: 03-5978-7517 E-mail: sec-pr@ipa.go.jp

■報道関係からのお問い合わせ先

IPA 戦略企画部 広報グループ 横山／一家

Tel: 03-5978-7503 Fax: 03-5978-7510 E-mail: pr-inq@ipa.go.jp